

ソン山中で終戦にいたるまで激闘を重ねたのである。

比島・ネグロス島

私の戦争体験記

兵庫県 前川 保

昭和十六年十二月八日、日本軍が米國ハワイ真珠湾攻撃をした翌年の昭和十七年九月一日、現役の航空技術兵で入隊を命ぜられました。この喜びは特別で、関東軍航空技術兵として勇氣百倍の思いで門司港に集合して輸送船に乗船し、目的地の釜山港に無事上陸ができました。

私たちは朝鮮平壤教育隊に入隊を命ぜられました。それから六カ月間は一般教育で、内務班の訓練など毎日が初年兵ばかりです。同年兵同士は何事をするにも、すべて競争的な生活で、他人より遅れをとらない、常に切磋琢磨して共に励むことが本願でありました。とくに私たちは北滿で鍛えた寒風にも負けない訓練を受

けた体験から、酷寒零下二〇度から三〇度という激しい気温のなか、日夜を欠かさず特別勤務に服しました。特別勤務としては衛兵の動哨勤務に服することの喜びでありました。特に真夜中、午前一時から午前二時の満月の晩など、全く内地では気にもしない時間ですが、この時間、北滿では頭上に光輝く北斗七星があり、これこそ昔から諺にもある尊い星座で、宇宙の天体における羅針盤として洋上の航海には必要とされます。これが私たちの頭上に光り輝いていた星でした。

それから間もなく関東軍航空本部より動員令が下りました。昭和十九年四月ごろ、航空隊第一独立警備隊の蘭崗に集結するようという発令であります。中隊長以下百十七人は直ちに編成されて、特に技術隊の諸兵器および物資を積み込みました。四月中旬ごろで、その日は猛吹雪でしたが、桜の花も咲き誇り、気温的にも変化の激しい季節でした。

それから間もなく南方派遣部隊として移動命令が発令されました。私たち南方第一独立整備隊でも先発隊の出陣式が迫り、完全軍装を整え勇躍征途に就くこと

になりました。この時の行進こそ、航空軍の厳正な姿を示したものであり、二度と内地や北方には帰らない意気込みを示した行進でありました。また、一般大衆の方々も見送りしてくださいました。

私たち南方第一独立整備隊は他の南方派遣の部隊と共に十六隻の輸送船団を組みました。この南方移動整備隊と各航空部隊の乗船した船団には、巡洋艦が監視・護衛・警戒に当たり、マニラ港に無事到着しました。航海日数は約十四日かかりました。船室は三段に仕切られ、船内には三千〜四千人の兵隊が起居し、洗面などの水は一日に飯盒に一杯だけの配給でした。

輸送船団の航海中に雨でも降れば、全員が甲板に出て、衛生面には厳しく注意を払いながら、健康上の間違いが無いようにしました。そして大船団の全員がマニラに無事上陸できるよう祈り、そしてこのことを胸に秘め、上陸を喜ぶ祝杯を挙げられる日待ちました。次に南方派遣隊は島々に派遣・転進が決められ、マニラ飛行場には特別整備隊が配備されることとなり、私たちは、先発隊が飛行機の格納状況等を調査したマ

ニラのクラーク飛行場に展開しました。

昭和二十年五月中旬ごろには、驚くべき情報を受信しました。今まではB 29爆撃機の空襲などはたびたび受けて、クラーク飛行場の滑走路などは一夜のうちに弾痕のため二〇メートルぐらいの穴が三つも四つもでき、航空整備隊は困ったものでした。しかしこれらのことも飛行場設営の専門の海軍関係の設営隊が全く驚くべき早さで弾痕穴を埋め、独立整備隊も思った以上に作業ができました。そして毎晩のように爆撃を受けるとも弾痕に対しては全く心配がいらぬようになりました。海軍関係の設営隊の活躍は全く素早く、完全に埋め立てを完了しました。

私たち独立整備隊は、朝の午前四時から五時には作業は終わります。朝七時ごろから午前八時ごろには、敵の爆弾投下が決まったように行われますので、わが軍の損害を無くするためにも、朝八時過ぎまでは待機の状態にすることが大切でした。

ネグロス島の山脈が多い島は航空隊には特に有用な地形でありました。そしてネグロス島は地形的に凸凹

が多く滑走路のみがセメントの道路で、とても退避、避難には誘導しやすい飛行場でした。

昭和二十年六月中旬ごろ、ある日の早朝、傍受した情報は全く驚くばかりの音声で、当飛行場に戦闘機が約二〇機か三〇機が到着する、迎えられたしとのことでありました。その瞬間、東方上空に太陽を背にした約二〇以上の黒点が目に映ったのは、敵機グラマンの飛来でしたが、当飛行場は付近は荒地地で凸凹があり、これらは避難するには障害物として利用でき、機敏な退避で一人の傷害者も出さず、第一独立整備隊の全員が無事、空襲という難関を突破しました。本当にこの危機的な状態を突破して救われたことに、熱い涙が込み上がってきました。この喜びは筆や言葉では言い表せない感情でした。

いよいよ昭和二十年七月を迎えました。山下南方派遣第十四方面軍司令官からの命令が南方航空隊司令部より発令されました。ネグロス島の全員はジャングル生活を命ぜられたのです。

ジャングル山中は昼間も薄暗く、このような山中の

生活に大切な太陽の光は受けることもできません。山脈の高さは二〇〇メートル以下ですが、樹木の小枝などには皆苔が生い茂って、その苔は著ほどの太さもありました。木々の枝には五センチもあるヒルがついていて、知らずにその木々を動かすと落ち、体につきまといまします。また、トカゲなどは一メートル五センチぐらいのものは普通で、大きいのは二メートルぐらいのものが木に登って餌を待っており、その姿はとも気味が悪いものでした。

そのトカゲですが、食糧の欠乏したときなどは原住民に頼んで捕ってもらうと、全く驚くことに二匹か三匹を捕ってきて煙草と交換することがありました。

ジャングル生活では、主食が欠乏すると部隊は各方面に分かれて飛行場の格納庫や塹壕などに残っている食糧を運搬して帰りましたが、全く困ったことに、食糧の中の米はみな粃で、中隊ではそれを鉄兜に二合ずつ入れて各人がつくのです。粃から白米につくには時間がかかります。そのほかに副食が欠乏すると、遠く離れた野原に行き野菜・野草を採集します。私たちは

常に元気でですから、毎日のように野菜の採集に努めました。

ある時には、米軍の音波探知機に探知されて、ある小溝に隠れたまま夜明けまでその場から動けずにいたことがあります。川の中で三、四時間を過ごしたためにヒルが三、四匹足について離れないこともありました。しかしジャングル生活では全く太陽の光を受けないことが身体に害ですから、元気なうちは一日でも大切な野菜を採集するため中隊を後にしました。

食糧事情には悩まされましたが、私も毎日の野原の野菜採集に夢中でした。そして野菜の葉っぱの裏にまでは気が付かず、何日か過ぎて、野菜についていた害虫が移って耳の穴に入ったのか気が悪く、戦友に取ってもらったこともあります。ジャングル生活は全く身体に害はあっても益がなく、太陽から隔離された場所ですから、日ごとに自分の身体はその害虫におかされていたのです。

昭和二十年八月上旬ごろには、いよいよ耳の悪化が激しくなるように感じられ、それは太陽に当たらない

のが第一の原因と考えられました。ジャングル山中では戦友も共に苦しみ、全く同じ立場で考えて行動していましたが、これが皆の立場などが違おうとどうすることもできなくなります。私も耳を害虫におかされ、日が過ぎると耳が悪化して膿が流れ出てくるようになり、また耳が聞こえなくなり、臭いも強くなり、戦友が近づくこともできない状況になりました。

このことが整備中隊に知れ渡って、中隊から隔離される場所に連れていってくれました。「前川君も近いうちに自決しなければならず、最後の決断は自分で決めることでありますから、私も衛生兵下士官にお願いをしました。先のこととは分かりませんが、まずお願いしてその品物をもらうことです」ということでした。その品物とは砂糖の袋のことで、それを四枚、是非近日中にもらってくださいと申しました。

すると後日、中隊本部より砂糖の袋四枚を渡してくれました。それは私にとっては自決を左右する大切な品物です。初年兵当時に訓練しましたので、そのこと

は理解してもらっていると思い、まず衛生下士官に報告しました。足と腕に二枚の袋を巻きつけ、足の方は膝に二枚の袋を巻きつけて、犬や猫と同じように姿勢を低くして前進します。遠方からはまったく見えません。

昭和二十年八月十五日は第一独立整備隊の全員の終戦投降日であり、私は何も聞くことのできない哀れな軍人でした。この南方に南十字星を頭上に頂き、この南国で死にたくない一心から、決断をしたのです。投降日を部隊が決めた一時間先に私は出発して、「戸塚中隊と合流できる場所が分かれば、その位置まで先に出発します。もし途中に分からない場合は自決でもしたかのごとく哀れんで下さい」と決心しました。

昭和二十年八月十五日の日本帝国の終戦日には、畏れ多くも天皇陛下の玉音を聞くこともできない、哀れな人間になってしまったことを、淋しくもいつまでも忘れられない軍人でした。

それから七〇〇メートルぐらゐの位置でMPに捕えられ、少し離れた地点で米軍のジープに乗せられました。

た。そして消毒のためDDTを身体に振りかけられ、半日も白い粉を振りかけられたままでしたが、米軍の病院に収容されました。

病院ではいろいろな治療をされましたが、とくに耳を完治してもらったことにより、捕虜収容所の通訳とも会話できるようになったことが最大の喜びでした。

それからカラバン収容所に入所しました。今までは全く何の役に立つこともせずに月日が過ぎてしまいました。PW（捕虜）として、日本軍により崩壊・破壊した南方の島々の復旧やフィリピン国の復興に役立つことに喜びをもって働きました。

昭和二十一年十二月十三日、最終回の日本の傷害者と一緒に「氷川丸」に乗船して内地に復員でき、名古屋港に上陸、南方より無事復員できたことが何よりも嬉しく感じました。名古屋では三菱飛行機工場で三日間、DDTで身体を消毒して帰途に就きました。

全員無事復員できた喜びが一番で、大いに喜び祝杯を挙げたのであります。